キャンプ朝霞跡地計画は進むか

住民グループ「朝霞基地跡地利用市民連絡会」（大石紀子代表）は、「基地跡地全てを緑の公園に」国家公務員宿舎建設を受入れないこと、市の財政負担を減らすため、県営公園化を県に働きかけることを掲げて、6月14日、五千名の署名簿を朝霞市長に提出し、青葉台公園、中央公園、広沢の池を含む「緑の回廊」を維持するよう訴えた。

朝霞市に残された旧米軍基地の跡地の利用計画を、国、県、市の三者で協議する「朝霞市基地跡地整備計画策定委員会」（委員長・大村謙二郎・筑波大学教授）が去る4月より三回にわたって開かれ、国が移転を計画している国家公務員宿舎のイメージ図が国側から提示された。

同跡地をめぐって、有識者による朝霞市の策定委員会が昨年12月、最終報告書をまとめた。その内容は、中心部の16・4ヘクタールを公園緑地として整備するが、残りの飛び地計約3ヘクタールは、「事業用地」としており、国が申し入れていた二千戸の宿舎の建設に際しての交渉の余地を残したものであった。

財務省が第二回（5月15日）に提示した案（①案）は、朝霞税務署西隣の0・9ヘクタールに7階建て、同東隣の0・4ヘクタールに8階建て、中央公民館北隣の1・7ヘクタールに階段状の5～12階建ての集合住宅を建設、それぞれに駐車場を付設するというものである。

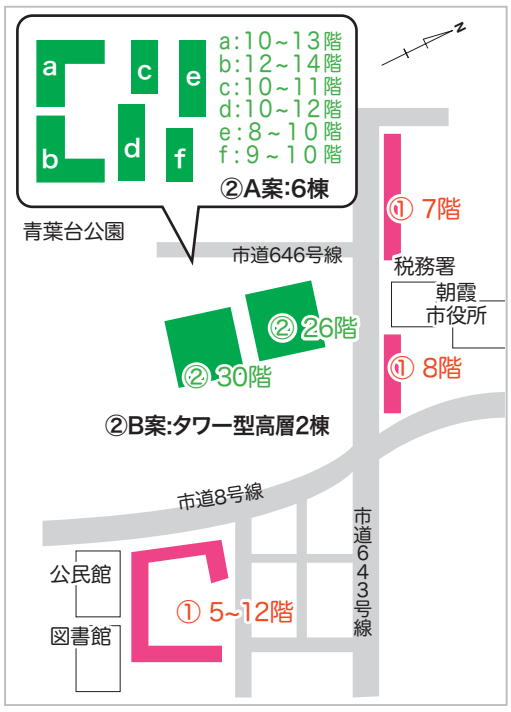
しかし、市側は「建物が壁のように立ちふさがり、圧迫感が大きい」「近隣の住宅への日照が阻害される」として、国に再考を促した。

市側の要望を受け、5月31日に開かれた第三回で国側は、新たに中心部（約16・4ヘクタール）の北西側の一部3ヘクタールに集約した建設案を提示した。

一つは8～10、12～14階建てなど6棟と駐車場（A案）、もう一つは、26および30階建てのタワー型高層二棟に駐車場を設置する案（B案）であるが、特にA案では、公開緑地を広く残せる利点があり、また、計画建設敷地内は、鉛などの土壌汚染が心配されていたが、国が土壌調査結果を公表、その処理費用を負担すると述べた。

分散して建設する第二案、修正して、一箇所に集中し建設する第二案（AおよびB）が提示されたことになり、朝霞市側では、持ち帰って検討することになっているが、国側は土壌の調査、処理を含めて三年間で建設を進める構えを示しており、次回は6月下旬に開催される。

註：空撮写真に宿舎建物を目印として記入した。正確な縮尺を示すものではない。



市民プレス
SHIMIN PRESS
7月1日　第34号

発行人　特定非営利活動法人「市民フォーラム」
編集人　原　昭二
制作・印刷　デジタル工房
FAX　048（476）9111
〒353-0004　埼玉県志木市本町5-18-24

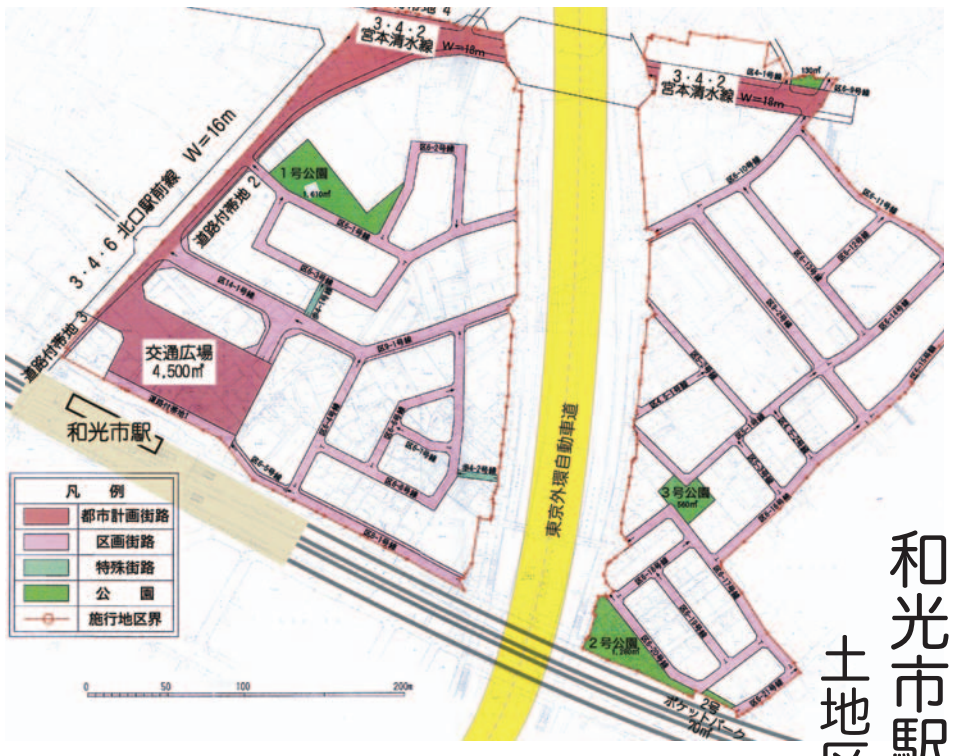
市民の目線で市民が発信する地域情報紙
WEB SHIMIN
http://shimin.camelianet.com

CONTENTS

---PAGE 1
- キャンプ朝霞跡地計画は進むか
  公務員宿舎建設予定
- 緑の基本計画に全力投球！
  新座市の「アクションプラン」
- 和光市駅前開発

---PAGE 2&3
引又河岸と市場通り
～志木市本町通りの今昔～

---PAGE 4
- 暮らしのヒント：味と香り
- 竹
- 首都圏歳時記：品川神社神輿
- 首都圏人 第7号発売
  NPO法人市民フォーラムが編集する
  [首都圏人]



和光市駅北口の土地区画整理事業の取組み（その2）

提示された道路計画（案）

和光市北口駅前は整備が遅れ、バスの発着にも不都合である。昨年土地区画整理事業に「優先区域」を定めるという手法が導入され、計画の第一段階となる道路計画（案）が当局から提示された。

市当局は、土地区画整理事業は駅前の景観を美しくするだけでなく、安全で快適な道路を整備しつつ上下水道や公園・緑地を設置する事業で、北口地区の住民はもちろん、和光市に住む人々や和光市駅を利用する人々にも関係する、市全体の事業と捉え、関係者、市民の理解と協力を求めている。

新座市指定無形民俗文化財
中野の獅子舞（毎年8月下旬）

緑の基本計画に全力投球！
新座市の「アクションプラン」

観光都市にいざづくりを推し進め、「雑木林とせせらぎのあるまちづくり」に取り組む新座市は、昨年基本計画を策定、これを実現するための「アクションプラン」が本格的にスタートした。

地球の温暖化、産業や経済の急速な拡大によるグローバルな環境問題を抱え、自然への回帰は、まず身近な緑地の保全からというアクションプランの実践は、われわれが担う共通の責務であり、実行されたのちの結果は、次世代への大きな福音となるに違いない。

新座市の宝は片山、大和田、野火止など、各地区に残された歴史であり、その重みである。平林寺を中核として、台地を流れる野火止用水の歴史と、いまも変わらぬ景観は掛け替えが無い。

新座市の緑の基本計画「アクションプラン」は、これから十五年後の将来像を目指し、目標年次を平成32年としている。

大和田の「はだか神輿」（毎年7月下旬）

写真は、「新座写真クラブ交流会」の「わがまち新座」写真展より

歴史を紐解く

引又河岸と市場通り

～志木市本町通りの今昔～

舟運のはじまり

ときは江戸時代、寛永のころにさかのぼります。埼玉県西部の中心として知られる「川越」は、かつて江戸城北方のもっとも重要な防衛拠点だったのです。川越は徳川幕府にとり、きわめて重要なまちでした。江戸と関係の深い史蹟の残る川越は、いまも「小江戸」といわれていますが、寛永十五年（1638）大火に襲われ、市内の重要な建物である東照宮、喜多院などが焼失してしまいました。当時東照宮は三大東照宮の一つに数えられており、その再建のために幕府は大変神経を使ったのです。

さっそく江戸城にあった紅葉山御殿を分解して、用材を川越に移築することになり、その運搬には陸路より効率的な新河岸川による水運が選ばれました。新河岸川の舟運はこのときはじまったとされています。また川越からは農産物が江戸に送られ、その後次第に新河岸川の舟運は整備されて、ついに川越と江戸との物資交流の大動脈となりました。

江戸と川越との物資の交流のため、新河岸川の舟運は欠かせないものとなり、現在川沿いに建っている志木市役所の下流、柳瀬川と分岐する地点に舟着場が設けられました。当時この辺は引又宿といわれており、その河岸（引又河岸）に、川越藩主の命令によって、荷物の運送を取り扱う「井下田回漕問屋」が開業しました。

「井下田回漕問屋」の敷地は、浦和、所沢を結ぶ県道が、バイパスと分岐する地点にあり、現在では道路となっていますので、往時のたたずまいを偲ぶことはできません。

しかし、「井下田回漕問屋」を支えてきた井下田家は、初代から十八代にわたり綿々と引き継がれたのです。特に十六代慶十郎、十七代四郎、十八代井下田慶一郎氏はそれぞれ、舟運に代わる交通機関として東武東上線「志木駅」の誘致、町長として志木町政に、また志木駅前開発などに貢献されています。井下田家に伝えられた古文書は580点にのぼり、志木市の歴史の重要な資料となっており、これらをもとに、十七代の四郎氏は「引又河岸の三百年」（非売品）を執筆されています。

以上四郎氏が執筆された本を参考にして「井下田回漕問屋」を紹介しました。

野火止用水といろは樋

「引又宿」（現在の志木市本町）には舟運の引又河岸のほかに、もう一つの名物がありました。それは現在の本町一、二丁目、かつては「市場」と呼ばれていた通りの中央を流れ、新河岸川に注ぐ「野火止用水」です。この用水は、寛永十六年（1639）に川越城主となった松平伊豆守信綱が自領であった「野火止」の原野を開拓するため、承応四年（1655）に灌漑用水として掘削したものでした。当時江戸市民に飲料水を送るため、玉川用水の工事がはじまっており、信綱はこの水に着目したのです。小平市の辺りから分水し、短期間でこの用水の工事を完了させました。

野火止用水は志木市のメインストリートを貫通し、新河岸川に流れ込んでいたのですが、寛文二年（1662）、引又の対岸、宗岡地域の地頭岡部左兵衛は、新河岸川を越えて送水し、灌漑用水に利用しようと考えました。そのため家臣の白井武左衛門に命じて巨大な架け樋を造らせたのです。この架け樋は四十八個の木の樋をつないで造られていたことに因んで「いろは樋」と名付けられ、長さは230メートルにも及びました。しかも舟の通行を妨げぬよう川面から4～5メートルも高いところに架けられたのです。樋は「江戸名所図会」に描かれ、この絵は国立公文書館内閣文庫に所蔵されています。

「江戸名所図会」より　手前が旧栄橋その上は「いろは樋」

用水は大小二つの桝を中継していましたが、大きな桝はいまでも残っています。もう一つの小さな桝の前には「桝屋」というお店（いまの感覚では、コンビニエンスストアのような）があって、人々に親しまれていました。

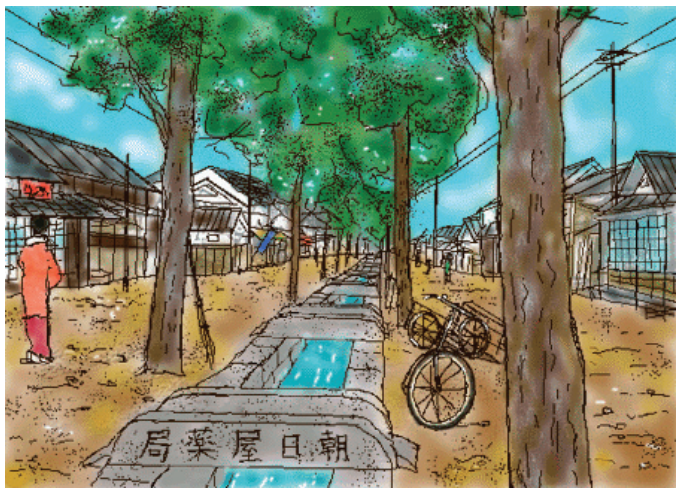
市場大通り

引又河岸の船着場から野火止用水に沿った市場通りには、江戸時代から幕末、明治、大正、昭和初期に至るまで酒造り、問屋などが軒を連ねていました。志木市に残されている古文書によると、江戸時代初期の住民として、「三上」、「星野」、「村山」の姓をもつ家族が草分けとされ、その後、「西川」家ほか四つの家系がこの土地に移り住んだと云われますが、現在でも市場通りには、これらの姓を名乗る商店が沢山あります。

慶応二年（1866）の六月、米価の暴騰をきっかけとして、武州十五郡、上州一郡（現在の埼玉県西部から群馬県にかけての地域）の広い地域で発生した「武州一揆」には、十数万人が加わり、江戸時代の一揆の中でも最も激しいものとされています。このとき市場通りの豪商はつぎつぎと一揆に襲われ、大きな被害を受けています。

二・七の市

江戸時代から、豪商が軒を連ねる市場通りには、用水を挟んで両側に、生活必需品を売買する「市」が立ちました。この市は近隣農村の住民にとって不可欠のものとなり、二と七のつく日に立つ市（二・七の市）は第二次大戦直後まで続き、旧正月、二月二日の市は、近隣の買い物客、見物客でごったがえしました。



野火止用水のイラスト

市場通りを貫通していた「野火止用水」は、昭和四十年（1965）、県道の大改修によって忽然とその姿を消し、二・七の市もなくなってしまいました。江戸時代から明治、大正を経て引き継がれてきた「市」とともに、長い歴史を刻んできた街の景観も失われました。

現在の市場通りは、いつも多くの車が列をつくり、道路は車で溢れ、車で埋まっています。かつての景観を偲ぶことはもはや不可能になってしまいました。

星野家の人々

先に述べたように、新河岸川と柳瀬川の合流点の近くには「引又河岸」の船着場があり、井下田回漕問屋を経て、市場の大通りへとつながります。市の立った大通りの両側には商店が軒を連ねていて、さきにも紹介したように、用水に沿った市場通りには、星野・村山・三上の苗字が目立って多いのですが、その中の一つ星野家は近隣各地にも拡がり、それぞれの地区で有力な地歩を築きつつ、いまでも綿々と続いています。一族はすべてが同じ家紋を使っており、誇り高い星野家の格式が偲ばれます。志木市の新義真言宗智山派の名刹、宝幢寺の寺紋も星野家の家紋と同じですが、有力な檀家であった星野家から家紋が贈与されたとする説もあります。

古地図「引又宿絵図」に描かれた市場通りのほぼ中央に、名主星野半平と記された一際大きな屋敷が目に入ります。この絵から当時の星野家の総本家が広大な邸宅を構えていた様子が窺えます。

さて弘化四年（1847）、二十二才でこの星野家に迎えられた養嗣子（半平と名乗る）は、引又宿の名主役を継ぎましたが、町民の紛争を調停することに優れた手腕を発揮しました。また知識人でもありました。江戸時代には自治集会所があって、「会所」と呼ばれていましたが、名主であった星野家の屋敷は近隣の人々のよきコミュニケーション・センターとなり、半平さんは星野家の「会所」で、名主を辞めた後も地区内の多くのトラブルを仲裁し、解決しました。星野家の会所は有力な集会所であり、半平さんの発言力は大きかったのでしょう。

幕末のころ、彼は品川の御台場まで船に乗って視察に出掛け、現在の板橋区高島平で行われた役人の大砲の演習を見学しました。また、ペリーの率いる黒船の来航、川越藩から浦賀への出動、各大名による防備固め、黒船の浦賀沖からの退去などについて、多くの見聞を記録し、これらを詳細に日記（「星野半右衛門日記」、半右衛門は半平を襲名する以前の名前）に書いています。この日記には身の回りに起こった日常の生活なども詳細に記され、当時を偲ぶ貴重な資料（志木市の指定文化財）となっています。

二代の半平さんが残した「引又宿古絵図」と「星野半右衛門日記」は、志木市の歴史を知る上できわめて重要なものですが、これらは、市の文化財保護審議委員長をされている神山健吉さんの調査によってはじめて世に出たのです。埋もれていたこれらの文化財がどのようにして見出されたか。そのときの状況を神山さんからうかがってみるこ

文化十一年（1814年）
の古地図より
（高橋長次氏が写されたもの）

とにしましょう。

神山健吉さんは次のように話されています。「星野半右衛門さんの曾孫、モトさんがお住まいになっていた逗子に伺ったのは、昭和四十八年（1973）のことでした。初対面だったのですが、歴史的な資料を蒐集するために志木から来ましたと説明すると、快く、いろいろなものを出してきて下さいまして、それが、「星野半右衛門日記」や、「引又宿古絵図」でした。ビニール袋の中に入れてあり、絵図はのりがみんな剥がれていました。拝見しますと、大変貴重なものでしたが、それらを丸まった形のままで貸して下さいました。ところがお会いしたのが六月でしたが、八月頃にモトさんは亡くなってしまうのです。その上、息子さんの和正さんが、昭和五十年に亡くなるのです。大変早死で、四十代半ばだったのですが、今は和正さんの奥さん、律子さんとその息子さんと娘さんがおられ、奥さんは「茜」という染物のお店を開いています。」

星野家の会所の跡はその後どうなったか。半右衛門は明治六年に戸長（のちの町長に当たる）を務めたのち、明治三十年代に裏に引っ込み、隠居所に入るのですが、星野照二さんというその息子さんが明治四十年代の始め頃、やはり町長を務め、明治の町政に大きな足跡を残しました。残念ながら早死で、四十三年頃に亡くなります。星野家の跡地はその後警察署となり、さらに明治の終わりごろ原林吉に引き継がれました。原林吉の開設した「朝日屋」（薬問屋）の建物は、二代目原林三、三代目原昭二の継承によって現在に至り、すでに百年が経過しました。

神山さんの調査によって、星野家の歴史がつぎつぎと分かってきたのですが、その日記を通して志木市史は明らかに、その厚みを増してきました。古絵図、日記を発見された神山さんの功績はきわめて大きいと思います。

古写真で見る　引又河岸の舟運

江戸時代後半から明治、大正期にかけて、志木市の本町通りは、商業のまちとして繁栄した。江戸と川越とを結ぶ物資交流の運河として整備された新河岸川沿いの河岸場をもっていたからである。新河岸の地名（川越市の南の地域にいまでも残る）、さらに新河岸川の名前も、川越に近い場所に新しい河岸場がつくられたためである。

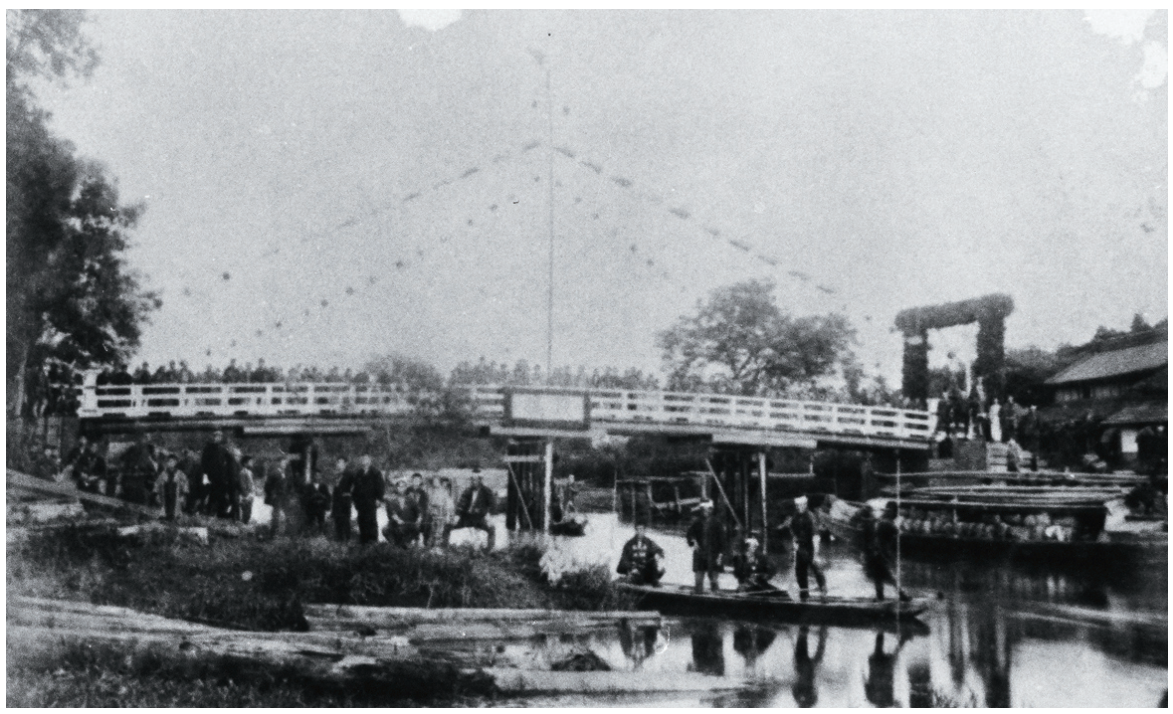
新河岸川では、川越方面から、米穀、材木、薪炭、ソーメン、ゴザなど、江戸からは肥料、塩、小間物、雑貨、綿糸、石材など。また引又河岸（明治七年以降は志木河岸）から江戸に運ばれたものは、近隣からの米穀類、小麦粉、青梅の薪炭、所沢の壁土、所沢、村山、八王子の織物、甲府の葡萄、生糸、また幕末以降は所沢、三芳方面からのさつま芋が特に目立つ積み荷だった。甲府からは大菩薩峠を経て荷物が送られてきた。

一方、江戸方面からは、熱海で樽に詰めた温泉がここを経由して町内や所沢方面に届けられた。長い間貨物運搬がメインであった舟運は、天保年間（1830～1840）からは人も運ぶようになり、定期便もでき、並船のほか、早船、飛び切り（急行）も運行され、早船で15時間かかった。

日露戦争中、穀物の輸送で忙しかった志木河岸（明治37年）

志木河岸へと向かう高瀬舟（大正初期）

宗岡水門下手の高瀬舟（昭和７年）


それ以前の土橋から欄干のついた新しい栄橋への架け換えを祝う人々（大正初期）

暮らしのヒント 味と香り

「味」のサイエンス…　その一

現代人は「グルメ」、食通、美食家を自任しているようだ。

テレビ番組でも食べ物の話題は断トツといってよい。また香りへの関心も高く、目まぐるしい現代生活のストレスを癒すものとして欠かせなくなった。

さて、味の良い食べ物は、果たして身体の栄養となって、健康に寄与するのだろうか。また良い香りが心を癒すだけでなく、身体にも良いのだろうか。

近年、味物質や匂い物質の研究と、感覚器を経て脳にいたる感知のメカニズムは目覚ましい発展を遂げ、「分子生物学」という、生き物の機能を、「分子」のレベルで追求する学問の中でも、先端の研究分野になってきた。

いげ田（志木駅前から志木市本町五丁目に移った名店）のランチ サバ定食

暮らしと健康に役立つ知識を身につけるために、今回は「味と香り」を科学的に追求した最新の結果に目を向けてみよう。

今回はまず「味」について

味は栄養と毒のシグナル

食べ物の味というと、甘味、塩味、そして酸味、苦味が基本とされてきた。しかし最近では、科学的な根拠をもって、これに「旨味」を加えることになり、味の科学は大きく進歩した。

それぞれの基本味は、われわれ動物が食物を摂取する場合、大事な役割を果たしていて、甘味や旨味は良い味で、こうした味のするものを人々は好んで食べる。また塩味は濃すぎると拒否されるが、適当な塩味は好まれる。一方、酸味や苦味は嫌な味であって、食べない。

甘味は糖のシグナル

甘味をもつ代表的な物質は糖である。糖は重要な栄養物の一つで、例えば脳のはたらきは糖をエネルギーとして使っていて、瞬時といえども欠かせない。

旨味のアミノ酸はタンパク質のシグナル

タンパク質はもっとも重要な身体の成分であるが、少数の例外を別として、それ自身には味がない。

タンパク質は約二十種類のアミノ酸から構成されているが、タンパク質に組み込まれていない遊離のアミノ酸には味がある。タンパク質が在るところには遊離のアミノ酸が存在するので、アミノ酸の味は、タンパク質の在り処を知らせるシグナルとなっている。

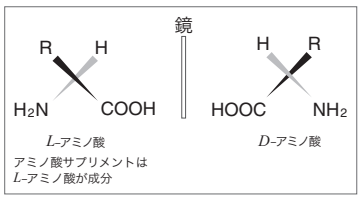
グルタミン酸は、タンパク質を構成するアミノ酸の中でもっとも多く含まれているアミノ酸であり、しかも代表的な旨味物質なので、タンパク質の良きシグナルである。

塩味はミネラルのシグナル

塩も動物にとっては欠かせない栄養素で、人の食べ物の調理と不可分のものだ。

（続く・・・）

参考書：栗原堅三「味と香りの話」岩波新書（1998）



アミノ酸には鏡像体がある

首都圏歳時記

品川神社神輿

六年振りに大神輿が交通の激しい京浜国道を渡御

品川神社の神輿は、徳川家が寄進したので、葵の紋をいただく。

急階段を登る宮入り

竹

竹（たけ）とは、イネ科タケ亜科に属する植物で、大型のものの総称。

一般的には大型のものを「竹」、小型のものを「笹（ささ）」と呼ぶが、笹との違いは、ふつう竹の方が大きいというだけでなく、稈（かん）（竹竿などに利用する部分）が木質化して硬くなること、筍（若い幹）を包んでいた皮（稈鞘）が完全に落ちて節が外からはっきり見えることなどをあげることができる。

なお *Phyllostachys* という属の学名は、葉(Phyllon)と穂(stachys)というギリシア語からなり、束状に出るモウソウチクの葉立ちを形容したもの。

生息地域は、気候が温暖かつ温潤な地域、アジアの温帯・熱帯地域に多い。

竹は成長力が強く、ピークの時は1日で1m以上成長する。

通常、地下茎を広げることによって生息域を広げる竹だが、新しくできた芽（タケノコ）は地下茎に連なる他の竹の栄養で育ち、地下茎は1年に7～8メートルも伸びることがある。

竹には60個もの節があるが、成長して増えるのではなくタケノコの時から同じ数の節を持っている。この節に成長点があり、この成長点がすべて伸びるのである。節と節の間隔が広がることによって背が高くなる。

また、成長に必要な栄養は地下茎を通してこれに連なる成熟した竹から供給される。これがピーク時には1日に80～100センチも伸び、2ヶ月弱の間に20メートルもの高さに成長する秘密である。

竹は、青々と真っすぐに伸び、成長が早いことなどから、縁起のよい植物とされ、松竹梅のひとつに数えられ、門松や七夕飾りに今でも利用されている。

乾燥が十分なされたものは硬さと柔軟さを備えており、さまざまな素材として利用される。その繊維を利用して紙も作られている。

竹酢液や竹炭としても利用されるほか、食材、飼料、建材としても用いられている。

よく知られているように、竹の細工は日本の芸術・文化を担ってきた。

しかし、竹の不思議、それはマダケが70年前後に一斉に咲いて枯れることで、この謎はまだ解かれていない。

また困ったことが起った。それは「里山」への竹の侵略である。

誰も手入れをしないアカマツの林などに、竹林が這い上って、やまを荒らすようになった。全国的に、竹の生長をコントロールしなくてはならない事態が起っている。

暮らしを楽しむ知的なヒントを与える「首都圏人」は季刊で発行しています。

一般書店・楽天ブックスで発売中

NPO市民フォーラムが編集する CREATIVE BOOK

第7号「首都圏人」

第1号 [ISBN4-8354-7204-7]
第2号 [ISBN4-8354-7205-5]
第3号 [ISBN4-8354-7213-6]
第4号 [ISBN4-8354-7214-4]
第5号 [ISBN4-8354-7217-9]
第6号 [ISBN978-4-8354-7214-0]

第1号 先端のサイエンステクノロジー
世界に向かって発信する基礎科学の研究拠点
この人　大河内正敏
生活習慣病恐るべし！

第2号 東京駅・東京駅開業
この人　辰野金吾
ヒトの英知は何処からきた？

第3号 東京大学
東京大学は知の頂点を目指す！
このひと　松永安左衛門
暮らしのヒント　ウイルスと免疫

第4号 江戸から東京へ
このひと　北里柴三郎
江戸、東京の祭り

第5号 大名庭園
旧芝離宮、浜離宮、清澄庭園
このひと　新渡戸稲造
味と香りのサイエンス　その1

第6号 アロマテラピーのサイエンス
このひと　高峰譲吉
味と香りのサイエンス　その2

季刊 B5版 100ページ（カラー50ページ）定価630円（税込価格）
発行：（株）ヒューマン・クリエイティブ
〒113-0033　文京区本郷5-9-5　TEL(03)3813-7937
FAX (048)476-9111　http://shutoken.camelianet.com/
発売：ブッキング
〒101-0062　千代田区神田駿河台2-8 TEL(03)3233-5336（代表）

特定非営利活動法人 NPO「市民フォーラム」

この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行い、報道によって市民の公共参加を推進し、地域内のメディア事業を行って、市民のコミュニケーションを向上させることを目的としています。

地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配付します。

※　※　※

◇　読者の「オピニオン（意見／考え）」を募集します。

TEL 090（3048）5502

編集部　原宛にどうぞ